

令和 2 年 6 月 26 日現在

機関番号：32620

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K16881

研究課題名(和文) 個別英語ライティング指導における学習過程の解明：トレーニングの実践と効果

研究課題名(英文) Exploring learning processes in individual writing conferences: Practicing learner training and its effectiveness

研究代表者

今井 純子 (Imai, Junko)

順天堂大学・国際教養学部・助教

研究者番号：00458506

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、大学英語教育でプロセス重視の作文教育を行うにあたって、個別指導＝ライティングカンファレンス(WrC)が果たす重要な役割を明らかにすることができた。WrCが普及する北米の大学に留学する日本人英語学習者のWrCでのチューターとのやりとりの観察や、日本の大学英語教育でのWrCの実践を行った。これらを通して、学習プロセスや支援ストラテジーが解明されるだけでなく、WrCへの参加が、学習者に書くスキルの向上だけでなく、自律性の育成や会話への積極的な参加等にも効果をもたらすことがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、プロセス重視の作文教育における、個別指導＝ライティングカンファレンスが担う役割を明確に示したことにある。また、個別学習支援の意義・効果を明らかにするため、量・質的データ、分析を組み合わせた混合調査手法のモデルを提案した。実践としては、自律学習支援の一環として大学英語教育の場で個別作文指導を提供した。支援の提供を通して、書く力の他、学習者の主体性、交渉力、問題解決能力といった学生のコミュニケーション能力を育成した。

研究成果の概要(英文)： This study contributed to the research on second language (L2) writing by identifying the important role of writing conferences (WrCs) in practicing process-oriented L2 writing pedagogy in university-level English education. The researcher first observed how Japanese learners of English interacted with their English writing tutors in a North American university. She then used part of the observation data as a model to raise Japanese university students' awareness to the benefits of making use of WrC opportunities that were newly established at a participating university. The study concluded by reporting the meaningfulness of L2 WrCs beyond developing the learners' writing skills including their autonomy and active participation in interacting with their tutors.

研究分野：外国語教育

キーワード：ライティング・カンファレンス 個別英語ライティング指導 第二言語ライティング 作文指導 自律学習支援

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

ライティング・カンファレンス(WrC)は、学習者が教師やチューター等の支援者と個別に会い、口頭で作文の修正案を検討する場である。北米の大学では、学生が積極的に授業の課題レポートに取り組む自律学習を支援する場としてとらえられており、チューターが常駐するライティングセンターが普及している。英語を始めとした第二言語ライティング教育においても WrC は、書き手のプロセスを重視し、フィードバックを与える場として推奨されている。北米の高等教育機関で普及している WrC であるが、日本の大学英語教育での運用は限られている。近年、学習支援や就職支援に個別指導を取り入れ、ライティングセンターを設置する大学も散見されるが、日本人大学生の WrC での学習プロセスや実施の意義については、検証されてこなかった。

### 2. 研究の目的

本研究は、プロセス重視の作文教育において個別指導 = ライティングカンファレンス(WrC)を取り入れる意義と効果を明らかにすることを目的とした。具体的には、アメリカの大学に留学する日本人大学生の WrC を観察し、学習者とチューターの視点にも目を向けた。また、日本の大学英語教育においても WrC を実践し、学習プロセスと支援ストラテジーの解明を行った。

### 3. 研究の方法

本研究では、まず、北米の大学の第二言語としての英語(ESL)プログラムの中に設置された WrC に参加した日本人留学生の学習体験を 1 学期間通して動画に撮って観察し、その前後に、学習者とチューターにインタビューを行った。また、学習者を対象として事前事後に簡単なエッセイとアンケート調査を行った。データ分析においては、個別学習支援の意義・効果を明らかにするため、様々な質的・量的データを集め、統計分析や質的内容分析を組み合わせ、結果を比較する混合調査法の手法を採用した。さらに、アメリカの大学で収集した映像データの一部を、日本の大学での英語科目を通して日本の大学生にも視聴してもらい、WrC に参加する意義についての話し合いを取り入れた。また、実施先の言語学習センターや卒業論文指導における個別学習支援の一環として WrC を導入し実践を行った。

### 4. 研究成果

本研究では、1 学期間の WrC を通しての学習の効果を、ライティングの質 (Writing)、WrC に対する態度 (Attitude)、学習における自律能力 (Self-Regulatory Capacity in Writing Conferences: SRCWC) という 3 点からとらえるため、事前・事後のアンケート調査とミニ・エッセイを、日本人学生 (日本の大学からアメリカの大学へ 1 学年間留学する学部生)9 名を含む、追加の WrC 参加への協力者全員 (N=28) を対象に行った。事前調査におけるそれぞれの指標の平均値 ( $M$ ) は Writing (100) = 77.07、Attitude (6) = 4.55、SRCWC (6) = 4.32、事後調査における平均値 ( $M$ ) は Writing (100) = 78.85、Attitude (6) = 4.54、SRCWC (6) = 4.51 でライティングの質と自律能力には僅かな伸びが見られるものの、態度にあまり変化は見られなかった。コントロールグループとして、WrC を受けなかった同 ESL プログラムの所属学生 39 名 (日本人大学生 13 名含む) にも同様の調査を行い、事前調査におけるそれぞれの指標の平均値 ( $M$ ) は Writing (100) = 75.22、Attitude (6) = 4.21、SRCWC (6) = 4.16、事後調査における平均値 ( $M$ ) は Writing (100) = 77.66、Attitude (6) = 4.18、SRCWC (6) = 4.38 であった。両グループにライティングと自律能力のわずかな伸びが見られるものの、態度の変化には停滞が見られた。これは、(a) 海外留学をする学生自体が一般に WrC といった学習支援の場に前向きな意識を持つ傾向にあること、(b) 学期当初から既に WrC について特に高い関心を持っていた学生がボランティアベースで追加の WrC に参加したこと、(c) 学習者の態度は短期間ではあまり変化しない、ということが要因と考えられる。その一方で、ライティングの質と自律能力には、留学後の学生生活において伸びしろがあり、WrC への参加がその伸びをより加速したのでないかと判断する。

一方で、個々の参加協力者の学習効果を見たところ、得点の傾向はもとより、どの学生もライティングの伸びについてはあまり違いが見られないものの、態度や自律能力の伸びについては、相当のばらつきがあることがわかった。図 1 は、一部 (5 名) の学生の得点傾向であるが、3 つの指標全てに伸びを見せ、特に自律能力を向上した Dai と、ライティングと自律能力の伸びは少ないが、WrC に対する態度が極めて前向きになった Mai が、顕著な違いを見せている。

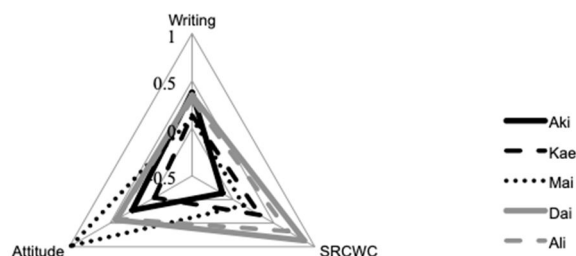


図 1 学期を通しての伸びの傾向 (一部抜粋)

表1は、3つの指標についての2名の詳しい得点傾向である。Daiは、ESLプログラムで上位のライティングのクラスに、Maiは下位クラスに属していたこともあり、ライティングのスコアを始め他においてDaiの得点がMaiを大幅に上回っていた。続いて、WrCセッションの書き起こしや映像、作文の修正過程、インタビューコメント等、質的なデータの分析を進めたところ、学習者のWrCへの参加の仕方やチューターの支援に、顕著な特徴が見られることが分かった。

表1 Mai と Dai の得点傾向

		Mai	Dai
Writing (100)	Pre	71.00	74.25
	Post	75.00	80.75
Attitude (6)	Pre	3.68	4.57
	Post	4.67	5.00
SRCWC (6)	Pre	3.40	4.13
	Post	3.53	5.00

まずDaiのセッションでは、学期を通して行われたどの回においても、学習者とチューターの発話量や回数に均等が取れており、コミュニケーションがスムーズに行われていた。各回の初めには、学習者が率先してその日話し合いたい内容を特定し、問題解決も学習者を中心に行われていた。学習者中心の傾向は、後半にさらに顕著となり、セッション後には大掛かりな作文の修正が行われた。セッションの中では、チューターが文法の誤りを訂正し助言する場面も見られたものの、大部分を占めるのは学習者とチューターが対等な立場で作文のテーマについてアイデアを出し合ったり、共にテキストを生み出す協働の場面であった。インタビューにおいて、学習者は常に目的意識を持ってセッションに参加したと、チューターは一步下がった立場から助言し学習者自身でのテキストの修正を促したと述べており、これらが学習者の自律能力育成を促した一因と考えられる。また、このペアは共通点も多く、同性であり、専攻分野も同じくしており、チューターが学習者のライティング課題について熟知していたこと、学習者もWrCをこれまでに体験していたことも、WrCがスムーズに行われた一因と考えられる。

一方、Maiは学期を通して(他のどの学習者よりも)発話が少なく受け身な体制が続き、チューターの発話を中心にWrCが進んでいく傾向にあった。しかしながら回を重ねるに従い、チューターの問いかけに応じる様子が見られるようになった。WrCはチューターによる文法の誤りの指摘と訂正が中心であったが、後半になると、ペーパーのテーマ(観光地の歴史的背景等)について、両者がそれぞれの立場から視点を話し合う等内容に焦点がいった場面も見られるようになった。インタビューでは、同時に担当していた他2名の学生との比較をチューターが行う場面が多く、性別、母語、英語の習熟度の観点から、Maiに対してはより一層の支援を心がけていた様子であった。話し合う事項の取捨選択をし、文法事項や内容について学習者から意見を引き出し、重要事項をメモをとって渡したり、図表を描いたり、使用可能な表現をリストアップし学生に選択させるなど、様々な工夫を凝らしていたことが映像においても確認できた。学習者側も、初回は初めてのWrCの体験に戸惑いや緊張を示したが、インタビューにおいて好意的な意見を述べるものが徐々に多くなった。また、チューターから学んだ事についてインタビュー次いでに第三者に確認をとる等の積極的な面も見られた。チューターの支援と学習者のニーズのバランスが取れていたことが、学習者の満足度を得られた一因と考えられる。

上記の考察は一例であり、下位クラスに属する他の学生にも、文法の誤り訂正に特化して参加した結果ライティングの質を向上した者、自律能力を飛び抜けて向上した者等も見られた。どの学習者にも共通して見られた点は、個別支援を1学期受けることにより、書く力、WrCに対する態度、自律能力のいずれかに向上が見られ、談話への参加の仕方やテキストの修正の程度にも変化が見られたということであった。また、学習者に応じた支援方法の確立だけでなく、学習体験の共有、書き手としての相互成長など、チューター側からも参加意義が挙げられた。

データの分析に続き、これらのセッションの映像やインタビューの様子を、日本の大学英語教育の場や個別支援のワークショップにおいて、素材として紹介し、WrCにおける学生とチューターの役割について学習者と話し合いを複数回行った。これらの場は、作文を推敲する上での1対1のチューター・教員との談話に慣れていない日本人大学生が個別支援の意義を明示的に学ぶ機会となっただけでなく、ライティング個別支援の利用を促し、自律的な書き手になるトレーニングを実践を通して受ける場を提供したことも本研究の成果と考えられる。

本研究で得られた成果の国内外における位置づけとインパクトとしては、これまで主に北米の大学を文脈として研究されてきたWrCを、日本の大学英語教育に応用し、ライティング指導において個別カンファレンスが果たす重要な役割を示唆したことが挙げられる。また、WrCの効果は、書く力のみでなく、自律能力や態度、談話への参加の仕方等多方面から理解されるべきであるということ提言できたことにある。作文をWrCに持ち込み、問題解決の為の意味交渉をし、助言を修正に取込むには、高い意識とコミュニケーション能力が求められ、本研究では日本側でのデータを当初の予定どおり十分に収集し分析することができなかったが、本課題終了後も個別指導の提供を継続し、今後も日本の大学におけるWrCの意義について理解と伝達を深めていきたい。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 今井純子	4. 巻 4
2. 論文標題 Current trends in mixed-methods research: Potential for use in applied linguistics.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 順天堂グローバル教養論集	6. 最初と最後の頁 49-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 今井 純子	4. 巻 2
2. 論文標題 内容言語統合型授業(CLIL)における英語ライティング指導	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 順天堂グローバル教養論集	6. 最初と最後の頁 80-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 0件/うち国際学会 7件）

1. 発表者名 今井純子
2. 発表標題 Self-regulated learning in L2 writing conferences.
3. 学会等名 大学英語教育学会（JACET）年次大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 今井純子
2. 発表標題 Writing conferences for L2 learning to write: A case study.
3. 学会等名 The 2018 Symposium on Second Language Writing (SSLW)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 今井純子
2. 発表標題 What if the learners focus on grammar: Contrasting cases of L2 writing conferences.
3. 学会等名 Second Language Research Forum (SLRF)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Junko Imai
2. 発表標題 My thoughts are for the peace: Perspectives negotiated in a writing conference at a university EAP program in Hawaii
3. 学会等名 International Society for Language Studies (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Junko Imai
2. 発表標題 Writing conferences beyond grammar.
3. 学会等名 Symposium on Second Language Writing (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 今井 純子
2. 発表標題 カンファレンスを通しての第二言語ライティングの効果的支援
3. 学会等名 全国語学教育学会 (JALT)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Junko Imai
2. 発表標題 Effects of Writing Conferences on L2 Learners' Texts and Attitudes: Contributions of Quantitative Findings and Their Limitations.
3. 学会等名 American Association of Applied Linguistics (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Junko Imai
2. 発表標題 L2 Writing Conferences with Japanese Students
3. 学会等名 Japan Association for Language Teaching National Conference (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Junko Imai
2. 発表標題 A mixed-methods study on L2 writing conferences: Instructional effectiveness and discursive varieties.
3. 学会等名 The 18th World Congress of Applied Linguistics (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Junko Imai
2. 発表標題 A mixed-methods research on writing conferences: Roles played by conventional analytical methods.
3. 学会等名 Second Language Research Forum (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Junko Imai
2. 発表標題 Interviewing participants after L2 writing conferences: Its pedagogical and research roles.
3. 学会等名 The 17th Asia TEFL International Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----